



火星の暮らしから、ぼくらの日常を考える。

村上祐資

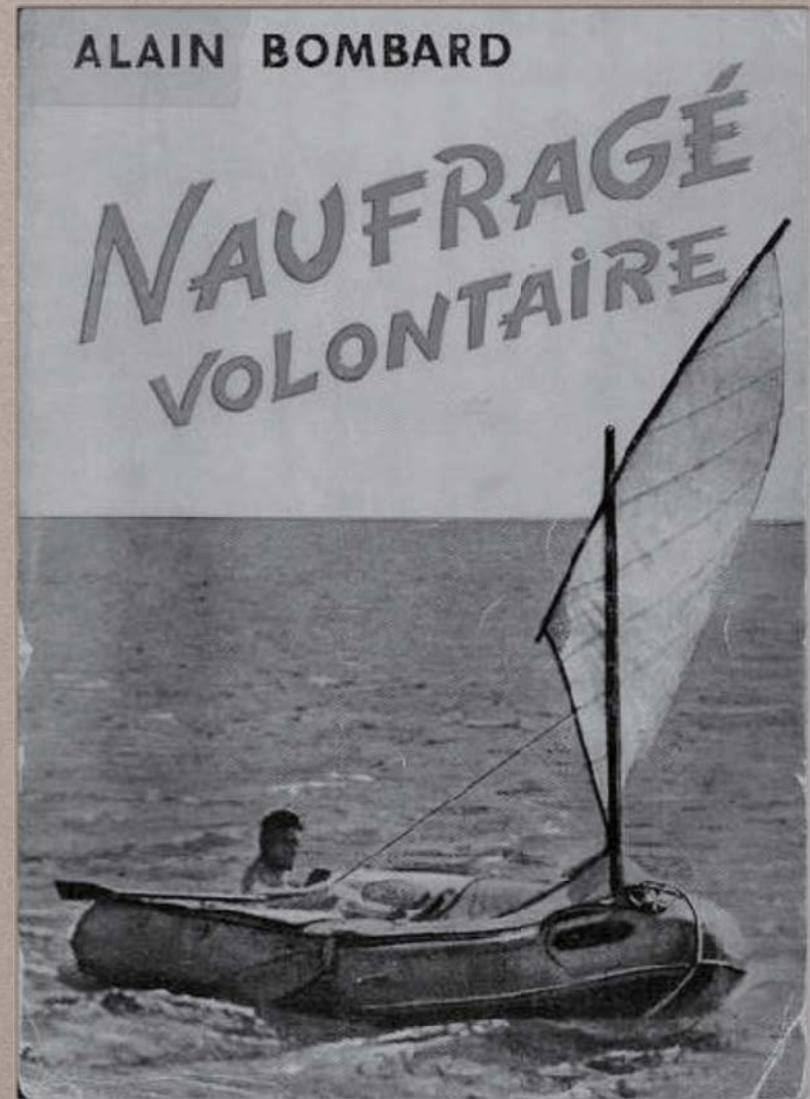
9割以上の海難者が 3日以内に死亡

「絶望は渴きよりも早く人を殺す。」

「あらゆる漂流者たちよ。精神は肉体を支配する。

きみたちを救うものは、きみたちの勇気なのだ。」

— アラン・ボンバル



火星

"Every single aspect of space is conspiring at every moment to pretty much kill humans."

宇宙の全ての側面は、人間を殺害するためにいかなる時点でも関係している。



— Madhu Thangavelu, 2000

ここではないどこか

ここしかないだれか

自分しか存在していない
ことへの恐怖



Mt. Shishapangma, Tibet, 2011



Mars160 / ARCTIC & UTAH, 2013-17



JARE50 / ANTARCTICA, 2008-10



EVEREST B.C. / NEPAL, 2010

人間がその土地に根を下ろす力
を土台とした、美しい暮らし方の踏査

人間の存在が否定された場所で

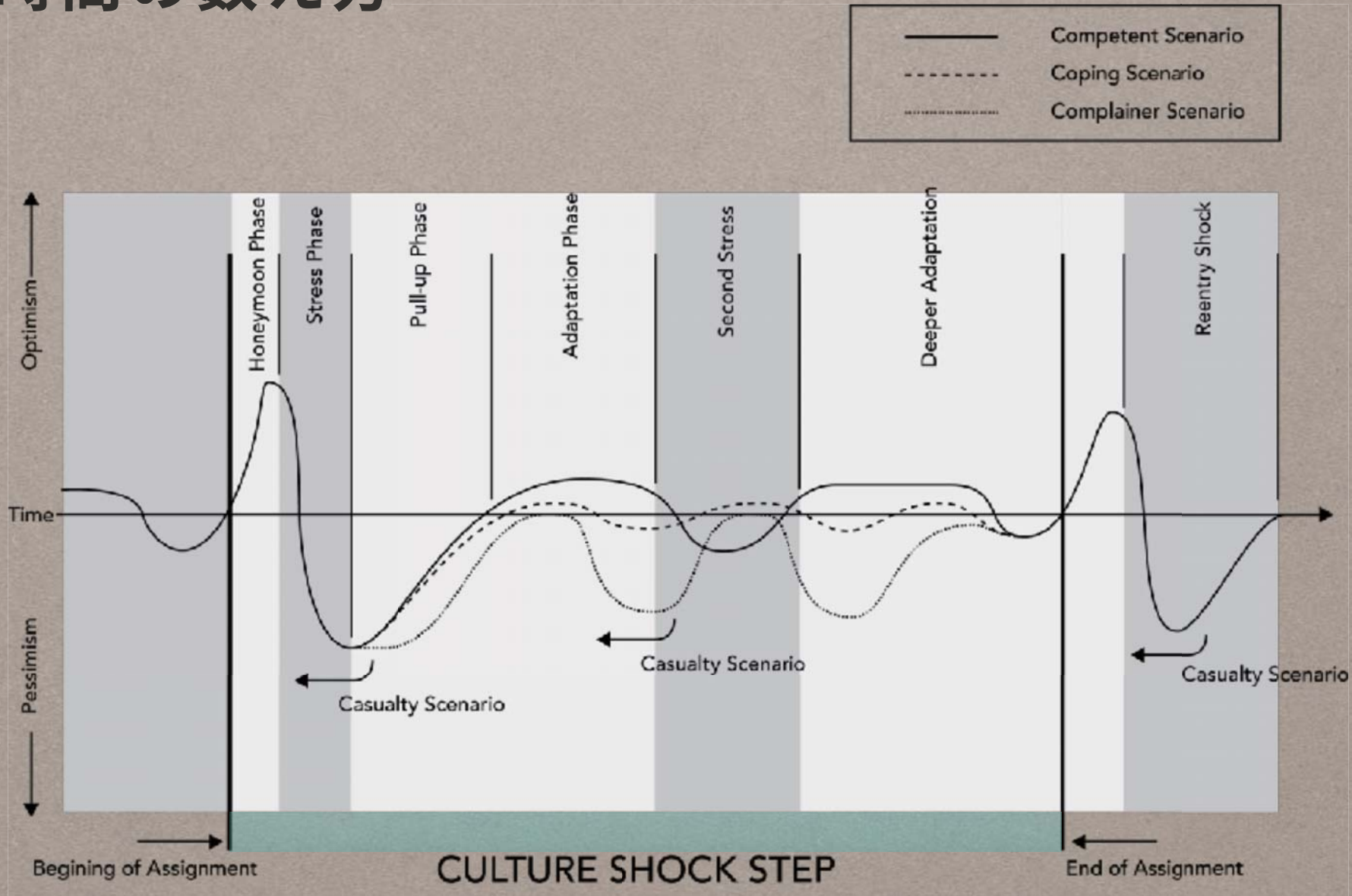
滞在する、暮らす、存在する

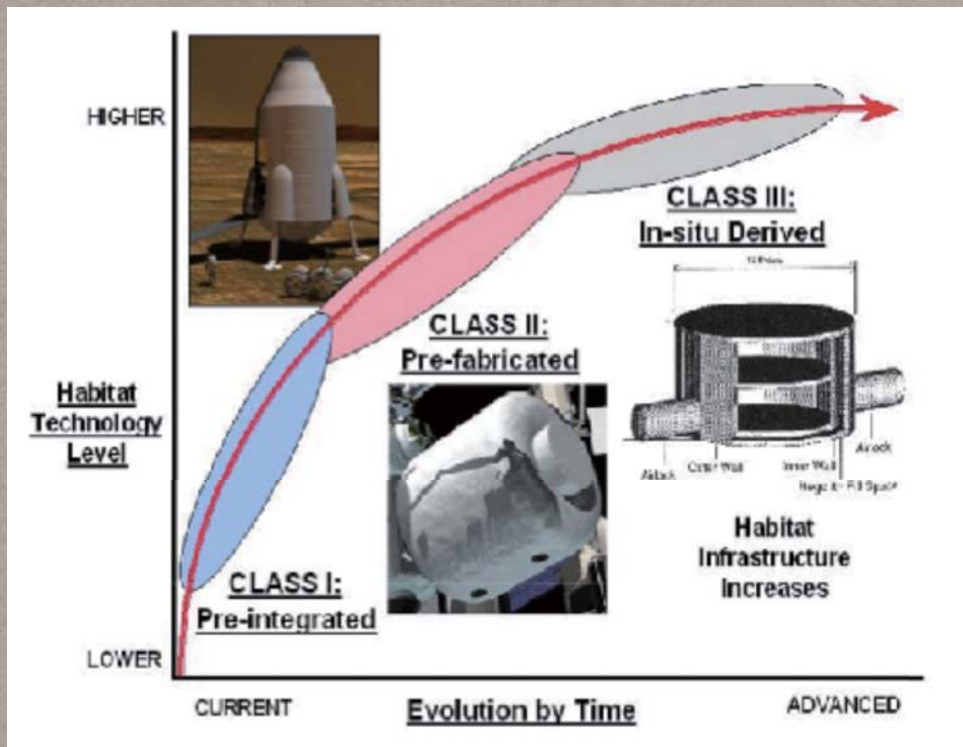
冒険家→

火星探査→

火星移住→

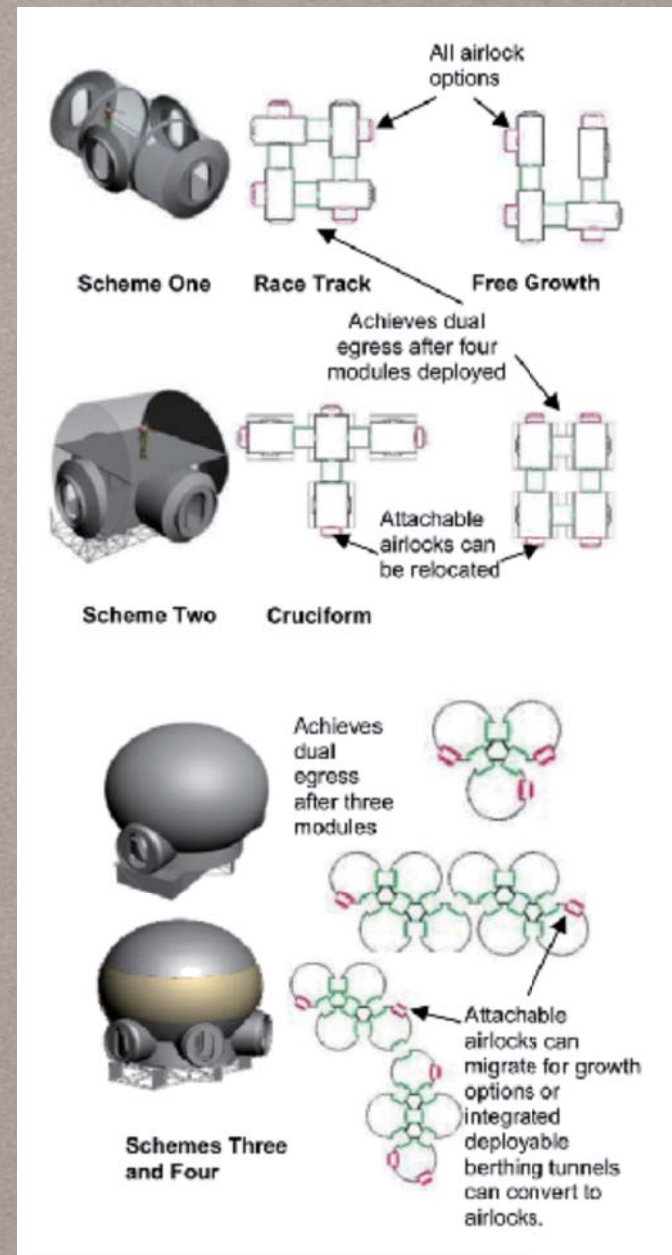
時間の数え方





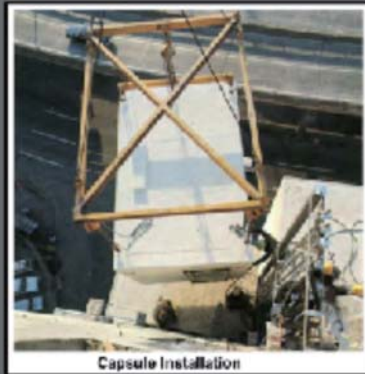
— The Vernacular of Space Architecture
(K. Kennedy, 2002)

— Designing from Minimum to Optimum Functionality
(Olga Bannova, 2009)





The 144 capsules were attached at the rate of five to eight per day, and all work was completed in thirty days.



Capsule Installation

Kisho Kurokawa JAPAN ARCHITECT



Nakagin Capsule Tower

Vertical Schemes

SPECIAL STRUCTURES

MODULAR COMPLEXES

F-4



Concrete House unit prototypes were developed in 1975 as an experiment aimed at creating a townhouse neighborhood.

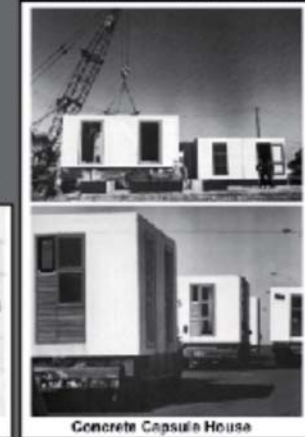
- Several 3m x 6m units were quickly manufactured using a special concrete forming process.
- Units were transported on trailers, and then bolted together at the site.
- The buildings could be extended up to three stories in height as well as connected together to form multi-dwellings.



Site Plan

F-23

Kisho Kurokawa JAPAN ARCHITECT



Concrete Capsule House

Horizontal Schemes

SPECIAL STRUCTURES

MODULAR COMPLEXES

— Shelter Design and Construction Part-II (SICSA Lecture Series)



HALLEY VI RESEARCH STATION

CG, 3D PRINT, VR, AI, next....CRYOGENIC SLEEP?

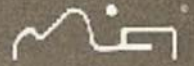
MARS ICE HOUSE

BLUE SKY DESIGN?



MARS CITY DESIGN

SF MOVIE SET?



ここではないどこか、とは

人間の根を下ろす力とは
かけ離れていく暮らし



SYOWA STATION



SPACE ANALOGUE SIMULATION



NASA HI-SEAS



IBMP MARS500



NASA HERA

MARS 160





MARS160

- ・地球上最も過酷な場所で
- ・4年間にわたる選考
- ・クルーの多様性（国籍、男女、年齢、専門性、経験）
- ・ツインミッション
- ・サイエンスリターン



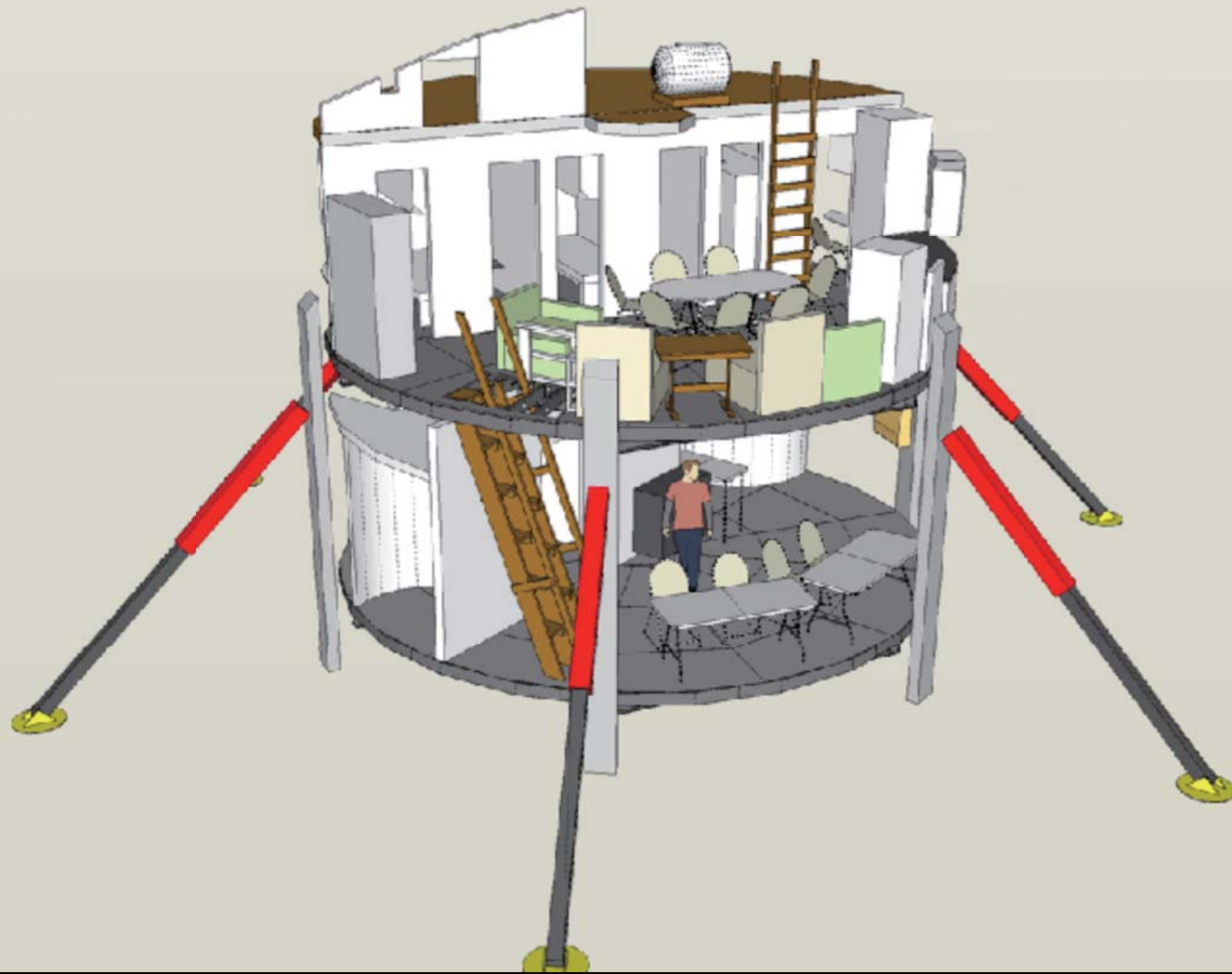
UTAH DESERT



DEVON ISLAND







Inside the HAB



NHK 「COSMIC FRONT ☆ NEXT」









— DEVON ISLAND

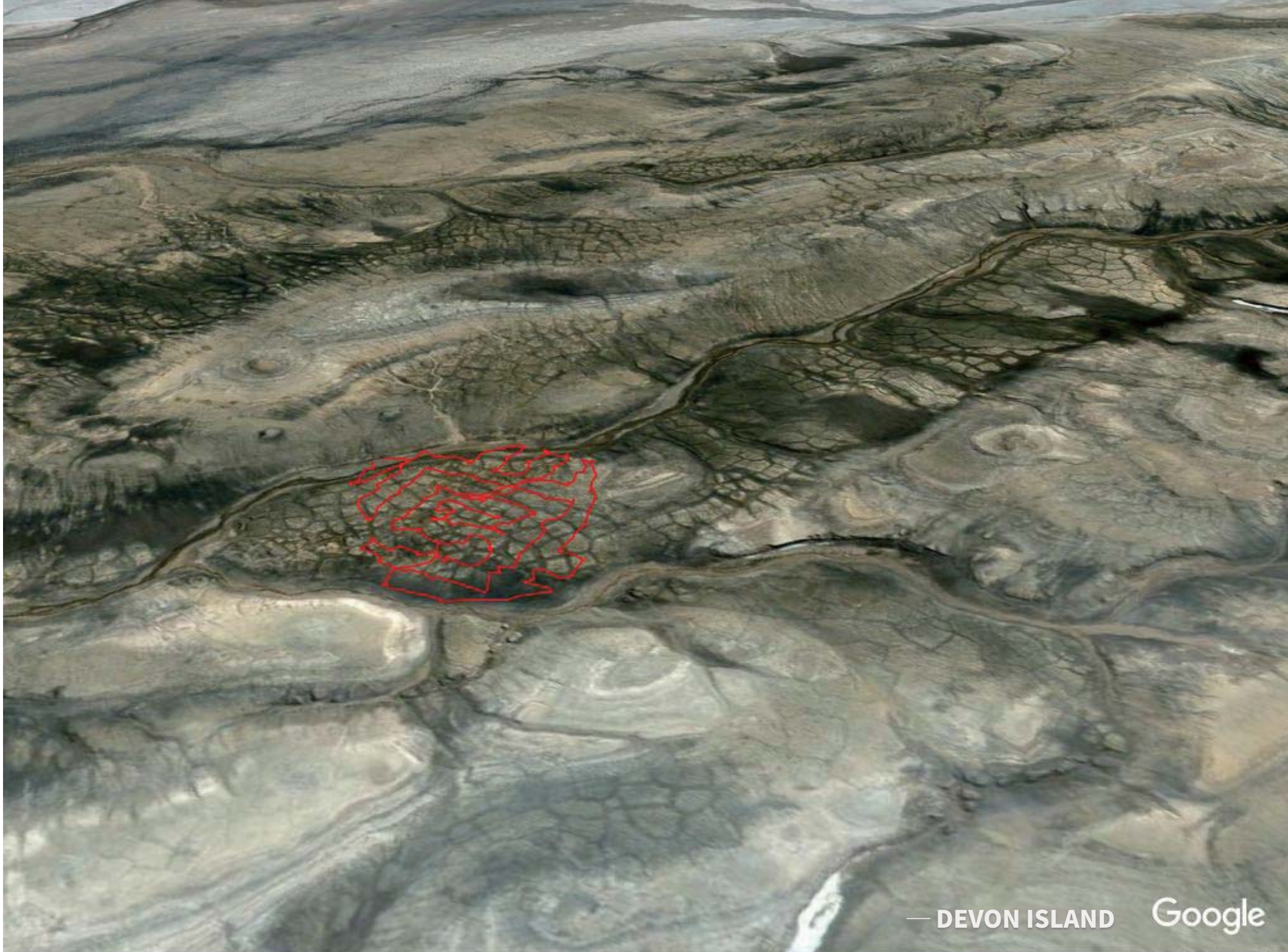


— MARS, NASA





—MARS, NASA



— DEVON ISLAND

Google



— DEVON ISLAND



Alex / Commander



Yusuke / XO



Anastasiya / HSO



Claude-Michel / Engineer



Paul / Geologist



Jon / Geologist



Annalea / Journalist



Anushree / Biologist



Shannon / PI & Backup



NHK
感星の冒険者

NHK 「COSMIC FRONT ☆ NEXT」

極地探検家
村上 祐資さん

ARMED TARGETS

習慣を奪われる苦しみ

They are here!

T- 8 days

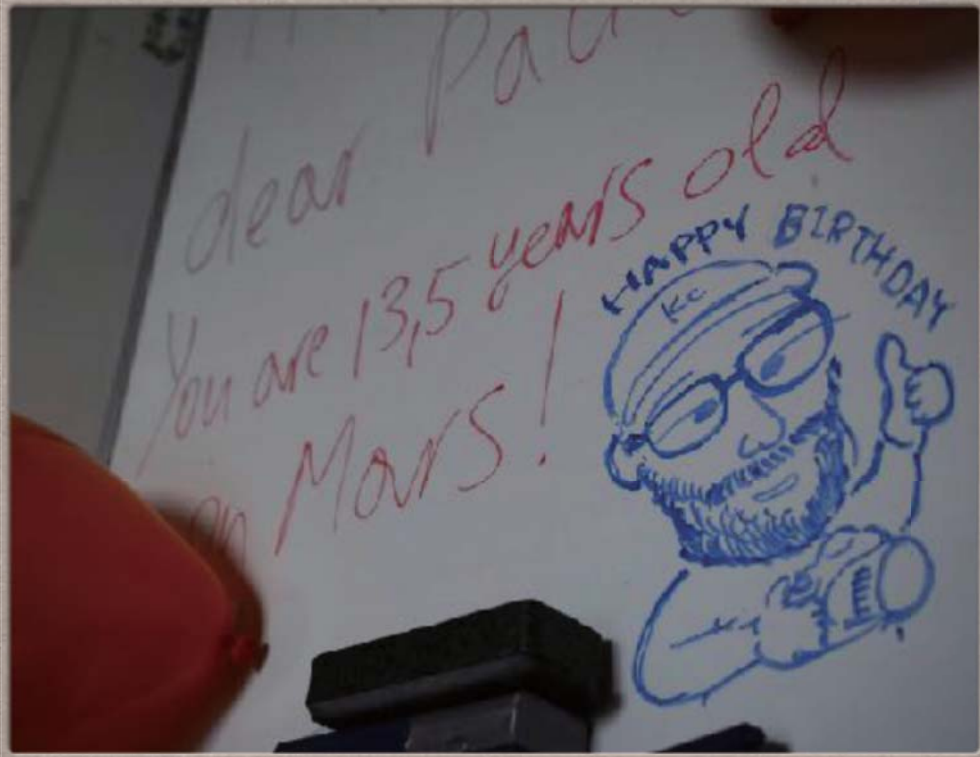
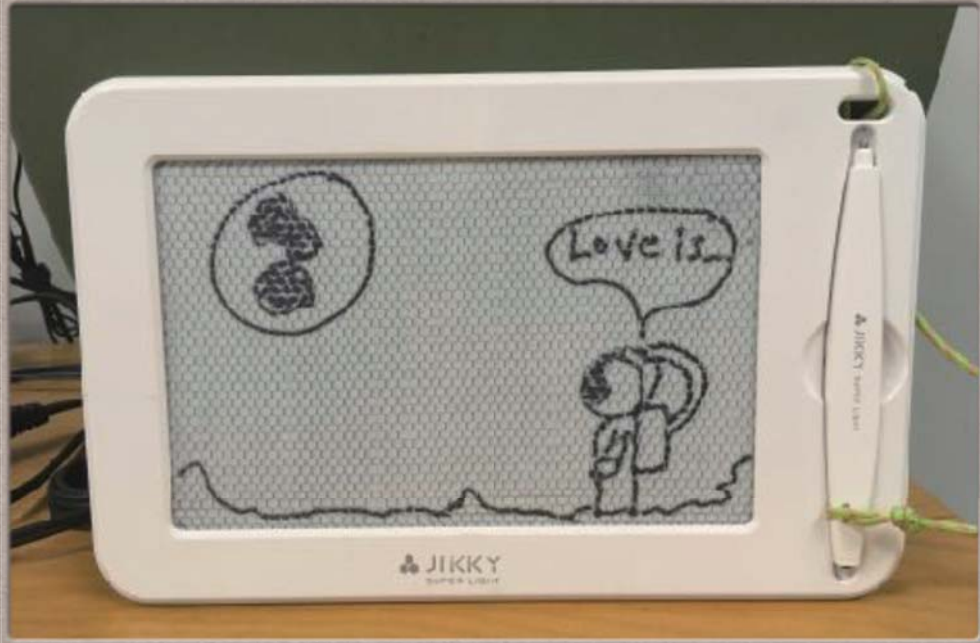
AT: fetch water Jan/Murdo/Ann
gray water Paul/Alex

Amast turning trash dishes

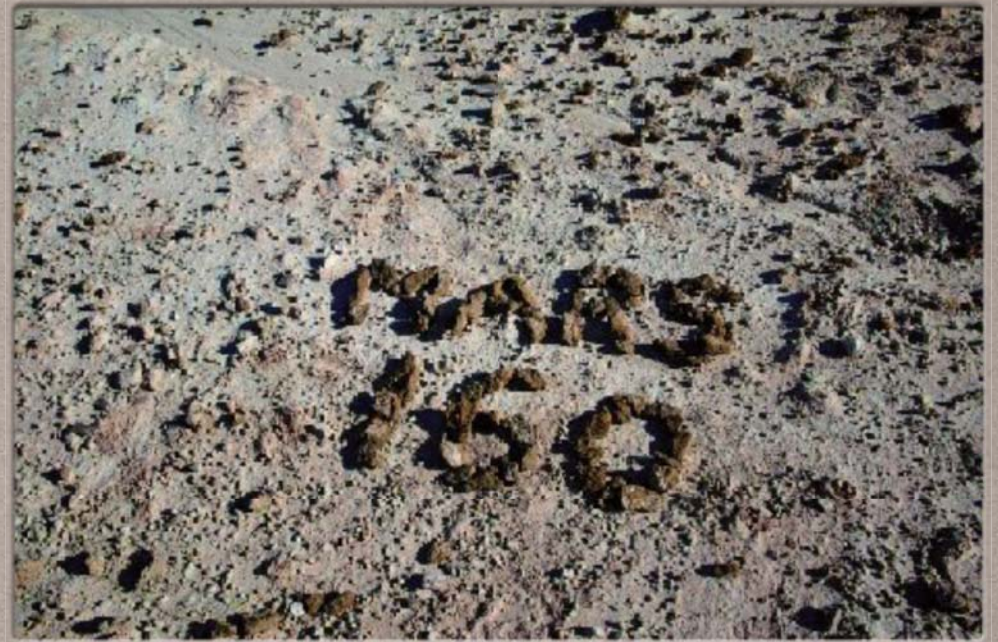
PT: EVA Sited Amast
Shenan tui stdy Ann
Paul

generator: cooking
8AT - 10AT Alex
11AT - 1PT Paul
3PT - 6PT
5PT - 9PT

final report: August 13.
How do you think the 16 program will affect future human to star missions?



宇宙には女性はあるが、母がない





明日をつくるために人が支えにするものと、今日の自分を支えてくれるものは、違う。明日をつくるというのは、意志を持続させること。今日の自分を支えることとは、気分を整えること。

冒険家にとって大事なことは明日だ。明日とさらにその先の明日とをつなぎ合わせて、目標地点へと到達する。今日の終わりを迎える頃には、もう明日のプランが出来上がっている。だから冒険家の衣食住は、明日をつくるためにある。食事は餌だと言い切れる。

けれど、気分を整えるために人が食べるものは、今日へのご褒美。だから彩りや盛り付けにも、喜びを見出そうとする。そんな小さな喜びを通して、生きていることを実感することが、今日の自分を支え、その積み重ねが日常をつくる。ぼくが憧れた極地の日常とは、そういう時間だった。

日常とは、習慣の蓄積

生き延びる—意志の持続—明日

生きている実感—気分を整える—今日

越冬交代を終えて、それぞれが新しい住処に落ち着き始めた昼飯頃に、火災報知器が発砲した。場所は50次では僕が管理していた地震計室。この建物は越冬後半、強風が吹くたびに誤報を発砲することが度々あったため、今回も強風による火災報知器の誤作動が考えられた。

しかし誤報であろうとなかろうと、いつもであれば僕らは即座にそれぞれの消火態勢の持ち場へと走る。たとえ外がブリであろうとそれは関係は無い。現に50次が経験した11月23日の火災事故はブリザードの最中での出来事だった。

でも既に越冬交代を終えた今、もう昭和基地の管理は全て51次へと引き継がれている。皆それぞれ今にも昨日までの持ち場へと走り出しそうな気持ちをグッと抑えながら、黙って昼食を摂った。

— 『越冬交代の意味』 村上祐資





—船上にて、ある夏隊員『リレー』

50年の間、毎年全く同じ海域で海水のサンプリングをし続けているのは日本の観測隊だけ。他国の観測隊はもっとすぐに結果の出る調査を優先し、こういう地味な作業はあまり行わないね。

でも自分が50年間続くリレーの、重いバトンを握っていると思うと、自然と気が引き締まる思いなんだ。

自分しか存在していないことへの恐怖
に抗うための、時間の数え方